



MEIJI GAKUIN UNIVERSITY  
明治学院大学 機関リポジトリ

## あんげろす第73号

著者	佐藤 正晴, 司馬 純詩, 土肥 歩, 植木 献
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニューズレター
巻	73
発行年	2017-07-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/3140">http://hdl.handle.net/10723/3140</a>

# あんげろす

## 宗教ブームに潜む不安

佐藤正晴

世にいう宗教ブームの現状を調べてみると、「大企業から急成長企業まで、宗教的経営花盛り」であるという。

今日、企業への忠誠心の強さが次第に薄らいでゆくなかで、日本的企業の強さを維持できているのは、宗教的儀式を経営に採り入れているからだといわれる。

「宗教」は、企業への愛着心やグループの結集力として、その効果をあげるために求められている。企業の「みそぎ研修」は若者たちにも好まれ、宗教的修養が嫌いで入社を取りやめたという話は、滅多に聞かないという。

社内の活性化を生むための祭り、「神」は見えなくてもいいとする宗教心、もとより企業の成績を伸ばすために宗教を求めるといふことは、何かの不安の反映ではないのか。様々な宗教・疑似宗教を生む人間の不安は、どうすることもできないものなのか。



ニッポニア・ニッポンは、天然記念物トキの学名である。近世までは東アジアに広く生息していた鳥であるが、20世紀に激減し、日本にようやく残る程度になってしまった。それを象徴して学名がニッポニア・ニッポンとなった。しかし、皮肉にも2003年を最後に、日本固有種のトキは絶滅してしまった。現在佐渡で放育されているのは、中国から譲り受けたつがいの子孫である。トキにパスポートがあったなら、中国籍である。

世界中すべての人間に、自国や自民族優越主義の「刷り込み」がある。当然私たちにも同様な刷り込みがある。ニッポニア・ニッポンの学名を付けて誇るのも、その現れである。

例えば、青森県下北半島には、人間以外の類人猿で、北限に住む(国指定の)天然記念物、ニホンザルがいる。研究によれば、2万年程も前から下北に生息しているという。このニホンザルが人為的にもちこまれ放たれたタイワンザルと交雑して、種の保存が問題となったことがある。

この話を聞いて、人はどんなサルを思い浮かべるだろうか。冬には温泉につかる知的で繊細なニホンザルに対して、粗野で、乱暴で、ニホンザルの群れを荒らしてエサを分捕るタイワンザルの姿を思い浮かべるのではないだろうか。しかし、サルはサルである。個体差はあっても、ニホンザルがタイワンザルに比して「知的で繊細」である根拠はない。私たちが頭の中で構築した印象は、私たちが幼いころから刷り込まれたニホンと言うイメージでしかない。タイワンの語によって思い起こされたイメージも、あるいは民族差別として問題にされる在日や外国人のイメージも、果てはLGBTに対する偏見も、全て悪しき刷り込みでしかない。身についた生まれであり、国家教育が助長した「育ち」の結果なのである。

刷り込みについて話をするなら、「ちょんまげ」にも言及しなければならない。日本で育った私たちには、この国の風習に違和感を持たない鈍感さがある。時代劇の大岡越前守や水戸黄門に何の不思議も感じない。しかし、登場者の髪はみな頭頂を剃り上げた「まげ」である。私たちは、そんな場面を、西部劇ワイアット・アープやピリー・ザ・キッドと同じように受け入れている。

しかし、ワイアットやピリーが現代と同じジーンズに皮ジャケット、ブーツであるのに対して、時代劇の登場者たちは、なんとも不思議な髪形を結っているのである。

世に男の長髪は少なくない。長髪を後ろで束ねたり、三つ編みにしたり、これを団子に丸めて後頭や頭頂で止めたりと、異なる文化には様々な風習がある。その中でもちょんまげは、伸ばした髪を後ろでポニーテールに結び、頭のとっぺんをそり上げて月代(さかやき)とし、結んだポニーテールをひっくり返して上にあげ、剃り上げた月代に乗せるのである。何の必然性があるのか。いまだ説得力ある説はない。奇妙に思わない私たちの心にあるのは、エスノセントリズムから来た鈍感な壁に他ならない。

私の周辺には、多文化背景の友人が少なくない。みんなそのようなエスノセントリズムを抜け出した連中である。ところがあるとき、国際学部で私がまげの奇妙さに言及した時、同僚の長老数人がひどく傷ついたらしく、「そんなことをいう君こそなにに人意識だ」といった反論めいた言を吐いた。私は、それで傷ついたり、「君こそなにに人意識」といった深層エスノセントリズムを指摘したにすぎないのだが。

例えば、私たちから遠く離れたアフリカ内地や、アマゾンの奥地に住む、文明の機器を知らずに生活をしている人たちはどうであろうか。日本の文化と私たちに劣等感を持ち、自民族の文化に気おくれを感じているだろうか。そのようなことはない。みんな「自分たちの民族、文化は優れている」と誇りを持っているも

のである。日本人が自国・自民族に持つ優越感と誇りと変わらない。

それでも、その人たちが日本に来て、この文化と人たちのふるまいをじっくり学べば、やがてその違いから優劣(あるいは好み)を考えるようになるであろう。

(もちろん日本を「優」とするとは限らない。)これが「境界(国境)超え」であり、「文化融合」と言うことではないだろうか。境界・国境を越えて他民族、他文化を学ばなければ、その良さが分からないのは、なに人として同じであろう。自分の生まれ育った地しか知らなければ、「自分の生まれ育った地が一番」と考える。井の中の蛙は、他を知らないし知り得ない。それに重ねて、近代国家は「国民教育」をもって、自民族・自国家優越意識を刷り込むのである。これが「民族と国家の陥穽」をはぐくむ。靖国神社や乃木、東郷神社、明治神宮があたかも「自然な存在」かのように鎮座し、生前退位が「悠久の歴史を破る」かのような騒ぎをする。改元問題がかまびすしいが、元号は国民を内向きに縛る政治的手法でしかない。こんなことで翻弄されるとしたら、私たちの国家と民族に対する客観性は、未成熟であると言わざるを得ない。

下北のニホンザルは2万年前からそこに生息している。私たちが「ニホン」をこの国に使い始めたのは、たかだか150年ほど前からである。私たちの持つニホンの深層意識は、近づく作られたものでしかない。それがこころの奥底によどんでいるのである。

しば・じゅんじ(名誉所員・本学名誉教授)

ある在華宣教師の日本(人)イメージ

土肥 歩

はじめに

ここ数年、外国人の視点から日本(人)の習慣・文化を過剰に賞賛するテレビ番組が多く見受けられる。そのなかでは、日本人の礼儀正しさや接客対応の丁寧さ、街路の清潔さ・治安の良さなどが強調される。しかし、大手新聞がそうした社会的風潮を批判的に取り上げることもあり(「耕論「日本ぼめ」の快感」『朝日新聞』2015年6月16日)、私が担当している非常勤先の講義でも、この問題について学生と毎年度議論する時間を設けている。

こうした観点で見た場合、キリスト教伝道にまつわる資料において日本(人)イメージが語られることは数限りない。『あんげろす』第70号では清水有子氏がイエズス会宣教師の資料を用いてこの問題を扱われていたことは記憶に新しい。そこで、小稿では清水氏の指摘を踏まえた上で、中国広東省で伝道活動をしていたニュージーランド長老会の宣教師ジョージ・マクニールが残した日記をもとに、彼がどのような立場から日本(人)を評価していたのかを紹介したい。(以下、丸括弧にて1905年中の日記の日付を表記する)。

## 1. 日本滞在の概要

マクニールは、1905年7月末にその年度の伝道活動を終えると、妻マーガレットとともに香港から汽船に乗船して日本に向かう。1905年8月8日に神戸港に到着すると、彼は鉄道と人力車を乗り継いで、有馬温泉付近にあった「清水ホテル」に滞在する。ここを拠点として天橋立を訪れたり、温泉付近を散策したり、場合によっては大阪・神戸方面に買い物に出かけている(この間日本に滞在する宣教師との意見交換も行われていた)。そして、9月18日に神戸港を出発し、9月27日に広州へと戻る。彼が所属していたニュージーランド長老会の場合、毎年9月からその年度の活動

を開始し、翌7月中に年次報告書を本国に送付し、その年度を終える。そのため、8月中は一部の例外を除いて、ほとんどの宣教師が休暇を取ることになる。マクニユールの場合、1904年夏はマカオで、1906年は香港で、それぞれ休暇を過ごしており、この日本滞在もその一環と考えて良い。

私が1920年までの長老会関係の資料を確認する限り、マクニユールが日本を訪問する機会に恵まれたのは、1905年夏の1度きりだった可能性が高い。そのため、彼が体系的な日本（人）論を展開していたとはいえないが、小稿では彼が日記に書き留めた記録を抽出してみたい。

## 2. 日本（人）評価

彼の日記から、客観的に見て彼が日本（人）に対して肯定的に評価している記述を紹介したい。まず、外国人に対する礼儀正しさ・親密さである。有馬温泉付近を散歩していたマクニユールは、「日本人はなんと礼儀正しく穏やかなのだろうか。彼らは決して怒鳴ることはない」と書いている（Aug. 21）。次に、治安の良さである。マクニユールは有馬温泉付近の神社を散策しているとき、賽銭箱が境内に無防備に置かれていることを発見し、日本国内の治安の良好さを驚嘆している（Aug. 14）。

日記に見えるマクニユールの日本（人）評価は冒頭で取り上げたテレビ番組の内容とも相通じる。しかし、賽銭箱の描写については、「もしこれが中国だったら何度も盗まれてしまうのではないかと」続くことに着目したい。換言すれば、彼は自身が居住していた広州周辺の治安状況から、日本（人）への肯定的意見を導き出していたと考えられるのである。

一方で、彼の日記には日本（人）に対する客観的もしくは批判的な意見が述べられていることも事実である。たとえば、三宮で買い物をしていた時、マクニユールは明治政府が肺結核の感染を防ぐために公共施設で吐痰を奨励していることを知ったようである。

これは、内務省令として1904年に施行された「肺結核予防に関する件（痰壺令）」のことであろう。彼は「日本のそれ〔政府〕ほど干渉主義的な政府は世界にはないだろう。日本国民が愛国的で「バンザイ！」を叫ぶのは不思議ではない」と続ける（Aug. 15）。「干渉主義的な」という表現からもわかるとおり、マクニユールは明治政府による衛生管理と同時代に行われている日露戦争を結び付けて考えていた。

おわりに

以上、マクニユールの日記から言えるのは、日本（人）に対する肯定的側面とそれ以外の側面が併存していたということである。とくに、日本（人）に対する肯定的な評価であっても、中国との比較を通じて評価が導き出されたと解釈すべきだろう。マクニユールは手放しで日本（人）を賞賛していたわけではないのである。そして、後者については日本（人）ではなく、明治政府の「干渉主義的な」法令を日露戦争と結びつけて批判的に解釈していた可能性が考えられる。

宣教師の日記に記録されたメッセージは、現代の日本社会とも無関係ではない。冒頭で紹介したように、外国人による過剰な日本（人）評価が報道されるなかで、聞き心地の良い評価だけを鵜呑みにしていないだろうか（冒頭で紹介した『朝日新聞』の記事は、過剰な日本評価が内向きのナショナリズムを生み出すことに警鐘を鳴らしている）。沖縄の米軍基地や従軍慰安婦をめぐる問題がそうであるように、現代日本で生活する我々に必要とされているのは、海外からの建設的な批判や提言に対して耳を傾ける真摯な態度ではないだろうか。

どい・あゆむ（客員研究員）

植木 献

アジア神学セミナーが始まった。当研究所ではここ数年、アジア神学を検討課題とし、対外的にも研究成果を発信していきたいという思いが強くあり、開講を検討してきた。

10名程度受講者が集まれば何とか実現できると当初考えていたが、結果として現役の牧師・教職者を中心に20名を超える受講者が与えられ、うれしいスタートを切ることができた。改めて課題の重要性を認識すると同時に、感謝する次第である。

このアジア神学セミナーの特徴の一つとして、超教派であることが挙げられる。講師陣もさることながら、受講者も多様な背景を持っている。講義を聴くだけでなく、他教会・他教派の事情・視点についても討論を通じて経験を共有できるのは大きな恵みである。

私自身、講師を担当する前に一参加者として本セミナーに出席したが、啓発的な講義に対して、参加者がそれぞれの立場から見解を述べ、また一般にはほとんど知られていないがキリスト教信仰の立場から重要な事柄の紹介をするなど、講師陣が教えられ、また触発されることの多い機会であることを実感している。

漠然と日中韓の3地域は同じような歴史を経験し、感覚を共有しているような意識もある一方、理解不能な対立を前提で非難し合う向きも巷にはあるが、一つ一つの事柄や、人と人とのやり取りは思いの外複雑多様であり、単純な構図での理解を慎む必要を感じる。同時に他地域での経験が現在の課題解決にもヒントを与えてくれる実践的な契機となることがよく分かるセミナーでもある。このセミナーでの経験はもっと広く共有されるべきであることを主催者としても痛感した。

そのこととも関連するが、秋に本セミナー開講を記念して、国際シンポジウム「東アジアの近現代史とキリスト教」を11月18日に開催することとなった。セ

ミナーでは中国の上海大学から陶飞亚氏、韓国の中央大学の張奎植氏、東京基督教大学の山口陽一氏を招き、講演と討論を3カ国の3研究所が協力して行う。通常こうした国際シンポジウムは英語でやることが多いが、今回本セミナーの多様性を重視する方針から、中韓日の3カ国語を用いて実施する予定である。

形式が内容を規定する側面は否定できないから、言語の問題も些細なようで重要である。準備はその分大変になるが、アジアの文脈からの繊細かつダイナミックな問題提起のため、準備の過程、また当日も諸氏にご負担をおかけすることになるが、ご理解をたまわりたい。

うえき・けん（主任）

研究所活動 (2017年4~7月)

公開講演会

「戦没者遺骨収集と辺野古新基地建設問題」

講師:具志堅隆松氏(沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表)

開催日時:2017年5月12日(金)15:30-17:30

開催場所:明治学院大学白金校舎本館8階81会議室

後援:明治学院大学国際平和研究所

宣教師研究プロジェクト公開研究会

「キリスト教学校の未来を考える一過去と現在からの考察」

講師:辻直人氏(北陸学院大学教授、本研究所協力研究員)

応答:大西晴樹氏(本学経済学部教授、本研究所所員)

開催日時:2017年6月21日(水)16:00-

開催場所:明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

宣教師研究プロジェクト研究会

第1回

開催日時:2017年4月12日(水)13:00-

開催場所:明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

第2回

開催日時:2017年5月15日(金)13:30-

開催場所:明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

第3回

開催日時:2017年6月29日(木)13:30-

開催場所:明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

新着図書

- ・『福音と世界』No.4、新教出版、2017。
- ・『福音と世界』No.5、新教出版、2017。
- ・『福音と世界』No.6、新教出版、2017。
- ・『福音と世界』No.7、新教出版、2017。
- ・『説教黙想 アレテイア』No.95、日本基督教団出版局、2017。

版局、2017。

・『説教黙想 アレテイア』No.96、日本基督教団出版局、2017。

・『説教黙想 アレテイア』No.97、日本基督教団出版局、2017。

寄贈図書

・『THE ORIGIN AND EVOLUTION OF THE SEMITIC ALPHABETS』小辻節三著、教文館、1937。

・『ヒブル語原典入門』小辻誠祐著、聖書原典研究所、1984。

・『ユダヤ民族』小辻誠祐著、誠信書房、1968。

・『戦時下のキリスト教主義学校』樽松かほる・大島宏・高瀬幸恵・柴沼真・影山礼子・辻直人著、教文館、2017。

・『旧約聖書ヘブライ語文法書』ハインツ・クルーゼ著、キリスト新聞社、2016。

---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第73号

---

2017年7月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所  
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37  
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214  
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩